

え、多くのスイク教徒も集う場になっている。グルドワラはドイツ全土で三〇か所ほどを数え、前述の二都市にも設けられている。

二都市のヒンドゥー寺院は総じて難民が設立した歴史を有し基本的に特定集団の信仰の場として機能しているが、タミル系寺院の場合、それがより際だった様相をみせている。

ロバート・スミッソンのアースワーク

中島和歌子

アースワーク (Earthwork) と称される芸術運動の名称は、一九六八年アメリカ、ニューヨークにおいて、ロバート・スミッソン (Robert Smithson) ら五名が主催した展覧会「Earth Works」に由来する。アースワークとは端的に土木工事であり、土砂、石、地面など、加工されていない自然の素材そのものを使用した作品であることが特徴であるため、絵筆の代わりにブルドーザーを用いる、という表現も知られている。

このアースワークの中心人物であるスミッソンは、一九七〇年にユタ州のグレイト・ソルトレイクに土砂を運んで、渦状に埋め立てて突堤を構築し、「スパイラル・ジェッティ (Spiral Jetty)」という作品として発表した。「スパイラル・ジェッティ」は、湖面の下降に伴っていったんは水没したが、水位の上昇によって浮上することもあり、バクテリアの棲む赤い水と、析出して突堤に付着した塩の白が対照的な光景を織りなしている。

スミッソンは本作と同名の映像作品「スパイラル・ジェッティ

イ」も残しているが、このフィルムにおいて彼は、ヘリコプターによって上空から突堤を撮影している。フィルムの終盤では、岸から渦の内側へと向かって突堤を走っていくスミッソン自身をヘリコプターが旋回しながら追うようにして撮影を行っているが、ここには、渦的な形状の作品、その渦をたどるスミッソン、そしてスミッソンを映すヘリコプターの航跡、さらにはフィルムの巻かれた形状までも含めた渦動の重層性が見出される。

この多重かつ渦的な動きによって強調されるのはなにか。渦の「中心」であり、中心の有する誘引の力であるだろう。本作の撮影時に、渦の中心部分にあたる湖面に太陽を映すようにというリクエストがパイロットに出されていたことにも注目したい。水面に反射した太陽光が湖と突堤を覆うように広がってゆく場面は、突堤から銀河への変容という解釈もなされている。これはスミッソンが六八年に体験した眩暈、別世界にいるという感覚、恒久性の感覚とリンクする情景であろう。

次に、右記との比較検討を試みる対象として、一九九〇年代以降のラビリンス・ムーブメント (Labyrinth Movement) に着目してみたい。ラビリンスⅡ迷宮は、それ自体が渦的なかたちをした図像である。近年においては、迷宮内の通路を歩くことによる瞑想・祈りといった実践がアメリカを中心に普及しているが、このような事例においては、迷宮の中心へと向かう身体的な渦動と、実践を行う各々がそれぞれの中心性を自由に探求する、いわば霊的な渦動が層をなしている構造が見受けられよう。そのため、渦動および中心の重要性という観点におい

て、現代における迷宮図像群を活用するスピリチュアリティと、スミツソンの作品「スパイラル・ジェットイ」には一定の類似性を見出すことができる。

スピリチュアリティとアースワークの比較へと敷衍するならば、スピリチュアリティが宗教教団や教義といった伝統、制度的なものにしばられない傾向を有する意識・精神性であることと似て、アースワークでは、作品制作の場として、美術館や画廊の外が主として選択されている。作家たちが、従来の美的制度に依らない実践の方法を探っていることに特徴があるといえるだろう。

なお、迷宮図像群のなかでも特に、クレタ型迷宮と呼ばれる、古代から伝わるタイプのものは、中世キリスト教において生まれたシャルトル型の迷宮と比較して描くのが容易であり、砂浜や芝生などの地面に直接描かれたり、石などを並べる、あるいは植物を植えるなどして構築される傾向にある。自然が素材になりやすいという点において、クレタ型迷宮は、アースワークの流れを汲んでいると指摘することができるのではないだろうか。

第十四部会

宗教性の行動と社会貢献

濱田 陽

ここに定義する「宗教性の行動」とは、自分の力と知覚を超えた、ある尊い何かに心をゆだね、それを拠り所としてなす行為である。ヨアヒム・ヴァッハは宗教経験の条件として1究極的実在への応答、2全人格的経験、3強烈さの自覚、4行動に帰結することの四条件を挙げた。ここでは、宗教経験の一条件に行動が含まれている。これに対し、行動面に焦点を合わせ、独立したコンセプトを立てることで、宗教経験について考え方や立場を異にしている行動をめぐる対話が可能となるような枠組みをめざしたい。宗教性の行動は、ある宗教を信じているから、ある宗教の教団に属しているからといって、それだけではない。ある宗教を信じ、ある教団に属しているとしても、自分の力と知覚を超えた何かを拠り所とする気持ちが弱まることもある。逆に、とくに特定の宗教の教えを信じている自覚がなく教団に属していない人でも、人生の重大局面に直面して一時的にせよ、その何かに心をゆだねる行為に出る場合も想像できよう。

宗教性の行動には、ある尊い何かを拠り所とする動機が外に明示されないものと、明示されるものがある。私たちは、多くの場合、一人の人間として、一般の行動とここで言うところの宗教性の行動との間を揺れ動く存在ではないだろうか。私たち